

City Walk #37

「Sky Bus Tokyo」

The Lights of Tokyo from a Double-Decker, Open-Air Bus
2008.09.26

The Lighting Detectives are always up to something unusual and for this city walk we rented a double-decker, open-air bus to cruise the streets of Tokyo. A specially planned route took us from Marunouchi → around the Imperial Palace → past the Diet → through the middle of Ginza → across the Rainbow Bridge → around Odaiba → back through Toyosu → across Kachidoki Bridge → up Harumi Avenue → back to Marunouchi. It was a neck-kinking, eye-popping, wind-in-your-hair tour!

Group photo in Marunouchi before the start of the tour. An air of excitement and anticipation as members boarded the bus for the 2-hour night tour of Tokyo.



■ The Long View of Tokyo

It's a rare thing to drive through the main streets of Tokyo, but even rarer to be seated on a double-decker bus night tour of Tokyo! Not only is your view transformed from a pedestrian on the sidewalk to the top of a bus, but also driving down the middle of Ginza and across the Rainbow Bridge are one-chance opportunities. The intimate tour of Ginza's main drag and its famous boutiques was exceptional in itself, but my personal favorite was the long view of Tokyo from the Rainbow Bridge and Odaiba. Up close Tokyo is a very bright and lively place, but as the skyline shimmered in the Tokyo Bay, you tend to forget all of the bustle and overly bright signage of the megalopolis and focus on the bigger picture. While white light and luminous signage dominate this view it is easier to digest against the black waters of the bay than when it is just a few feet away. It is actually somewhat relaxing to view the city for afar and Odaiba is a fantastic place to do just that. (Rachel Nakayama)



Driving through the heart of Ginza was the highlight for many on the tour. New and old methods for street and facade lighting were on parade, an excellent opportunity for comparing and contrasting lighting eras.

■今回のバスツアーで、日頃恥ずかしくてなかなか出来なかったことを成し遂げました。それは・・・「上を見上げながら街中に行く」こと。

東京の街中はビルが建ち並んでいます。いかにも田舎者と思われてしまいそうな気がして、上を見上げながら歩くことは今まで避けていました。

が、しかし！今回のバスツアーで首が痛くなる程、思いっきり見上げました！！都会でしか見られない景観に大興奮！とくに銀座のメインストリートを通り抜ける際には、林立するビルディングスケーブにただただ感嘆しました。視界に入って来るのは両側の煌々と照らされたビル、そしてビルの谷間に見える東京の空。いつもの人込みはバスの高さのせいで視界に入ってきません。銀座を独り占めしたような、なんとも優雅な気分です。普段見られない景色を堪能できたバスツアーになりました。（安田真弓）



Office tower lighting and residential condominium lighting dominated the scene on the drive back from Odaiba to Marunouchi. While white fluorescent lighting was the predominate color some condominiums glowed a soft orange.



Members all had stiff necks after 2-hours of continuous looking up, but nobody seemed to mind. Chatter even died down as the bus started along the route, as members seemed to take this opportunity very seriously.

■今回初めて照明探偵団の活動に参加させて頂きました。今回の街歩きのテーマは「バスから見る東京都心の夜の光」。2階建てで屋根のないバスに乗り、普段の目線とは違う視点から都市の夜景を見ることが出来、とても楽しいツアーでした。

バスはまず東京駅から出発して皇居を一周し、霞ヶ関を抜けて行きました。皇居周辺はやはり多くの木々と民家の少なさから暗く、とても静かな落ち着いた空気を感ずる場所でした。それに対して霞ヶ関は、まだ各省庁で働いている人々も多く、多くの窓から青白い光が溢れ出ていました。霞ヶ関の後はそのままだ日比谷公園を抜け、銀座一丁目から八丁目まで通過します。この銀座一丁目から八丁目までの通りが今回のツアーで一番明るく、そして一番印象に残りました。たくさんの有名ブランドが、各々のブランドイメージに合わせてファサードをデザインし、輝かせています。また看板広告も昔からあるアッパー等で照らす手法はあまり見つける事が出来ず、広告そのものが光り輝いているのが目に留まりました。一店一店としては面白く、綺麗で魅力的でしたが、一つの通りとして調和が取れているか、銀座の魅力に繋がっているのか等は疑問に思いました。

ツアー中、面出先生に都市の光（街灯）についても説明して頂いたので、そういった点でも勉強になりました。（大川郷）

ロシア調査 「変わりゆくロシアに行く」

2008.8.24-29

久保隆文 + 矢野大輔

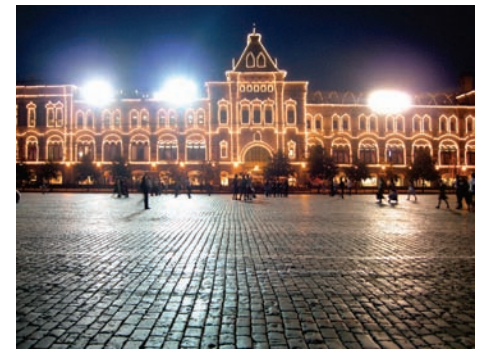
世界一の広大な国土を持つロシア。我々は豪華絢爛な装飾をまとった地下鉄駅舎や、スターリン・クラシック様式などの重厚な建築が多く立ち並ぶ街並みが、近年のバブル経済の影響により刻々と変化しているだろうと予測を立て、グルジアとの戦いのさなか期待と不安を胸にロシアへと飛び立った。
首都モスクワと文化芸術の街サンクトペテルブルグで団員が見てきたものとは…

■世界遺産「赤の広場」

首都モスクワの中心部にでーんと広がる赤の広場。数々の歴史の舞台となった世界遺産である。政治と軍事の中心クレムリン、玉葱頭の聖ワシリー大聖堂、国立百貨店 Gum、ロシア歴史博物館に四方を囲まれた、綺麗な石畳で構成されたこの広場は、夜になるとものすごい光量で照らし出される。Gum百貨店の屋上から巨大な投光器で広場をなめるように照らすのだ。写真のようにグレアが酷い。照度計を出すとポール灯も何もない広大な広場の中心の水平面で 42lx が出た。観光客が煌々と照らし出されている。その場に立った我々の眼を眩ませる光はとても不快で、少し残念に思いながらその場を去った。



首都モスクワに広がる世界遺産「赤の広場」。我々はこのロシア人美女に声を掛けられ、戸惑ってしまった。



世界遺産に与えられる光は深刻なほどとつもない光量で、時差ボケで眠い我々の眼を眩ませた。

■豪華！地下鉄移動美術館！

モスクワ周辺の駅構内はまるで美術館を歩いているような豪華な装飾で彩られていると聞いていたが、本当にすごい。まず、駅入り口からホームに降りるエスカレーターが長い。覗き込んでも先が見えないくらい長いのだ。100m 以上はある。天井には照明は付いておらず、コンパクト蛍光灯が入った照明が 3m 間隔でよきと生えている。

東京で言うと山手線に当たる環状線に乗って一駅づつ降りてみた。降りるごとに少しずつ趣向の違った、美しい装飾が施されたホームが我々を待っている。天井直付の蛍光灯などは一切無く、柱の上や壁面に隠された間接照明、タイル絵やステンドグラスを照らすための必要な照明ばかりだ。ほとんどが床面で 100lx 程度のほどよい明るさでとても気持ちがいい。駅がまるで美術館か地下の宮殿のようで、どこまででも行ってみたいくなる。どこまで乗っても電車賃約 80 円なので、おすすめの観光スポットだ。ただ、行き先表示などがすべてロシア語なのは参った。乗り換えする時は何本かの電車を犠牲にして、暗号を解くようにじっくりと表示とにらめっこしなくてはならなかった。



覗き込んでも先が見えない。100m 以上ある早くも急なエスカレーターをずんずん昇っていくツワモノもいる。



駅がまるで美術館か地下の宮殿のようでどこまででも行ってみたいくなる。天井直付の器具は一切無く、日本とはまるで違った。

■郊外に突如現れた新都心「モスクワ・シティ」

郊外の川沿いに「モスクワ・シティ」と呼ばれる 1992 年からロシア政府によって企画・立案された大規模複合ビル建設プロジェクトが進行中で、開発地区の総面積は 1 万 km²にも及ぶ。

およそ 20 区画あるうちの一つにノーマン・フォスター設計のロシアタワーが建設中だ。完成は 2012 年だが、世界一の高さを誇るブルジュ・ドバイに次ぐとのこと。照明計画は誰が担当し、どのような光を放っていくのだろうか。新都市モスクワ・シティ。街が完成するのは 12 年後だ。(矢野大輔)



ロシア政府によって企画立案された大規模複合ビル建設プロジェクト。新都市モスクワシティ。街が完成するのは 2020 年だ。

■文化と芸術の街 Санкт-Петербург

モスクワから赤い矢号と呼ばれる寝台列車に乗って、 Санкт-Петербургまで移動した。決して寝心地のよいベッドではなかったが、思いの外、列車の運転は丁寧で約 8 時間熟睡できた。

Санкт-Петербургはかつてのロシア帝国の首都であり、宮廷文化を象徴する豪華な造りの宮殿や聖堂、美術館が数多く建ち並ぶ。そんな Санкт-Петербургにおいても、ロシアの経済成長に伴った、街、建物、インフラなどに変化が見られるのだろうか。また、その光環境も変わっているのだろうか。という疑問を念頭において我々は夜の Санкт-Петербургを調査した。

■豪華絢爛な光環境

女帝の隠れ家エルミタージュ美術館。

このエルミタージュとはフランス語で「隠れ家」を意味しており、当時の王侯貴族が芸術作品を収蔵するために使用していたらしい。この上ない贅沢な私的美術館なのだが、その中の光環境もまた贅沢極まりないものであった。基本的にはどの空間においても、シャンデリアか装飾をまとった天井をコーブ照明で照らすという 2 つの手法に限られていた。大広間では 100 ~ 150 球の白熱電球が使用されている巨大なシャンデリアが惜しむことなくいくつも設置されていた。嫌味なまでに豪華さを強調している空間であったが、その美しさは素直に賞賛せざるをえなかった。



豪華絢爛なエルミタージュ美術館の大広間には数多の巨大シャンデリアが設置されている。

■ネヴァ川 VS 隅田川

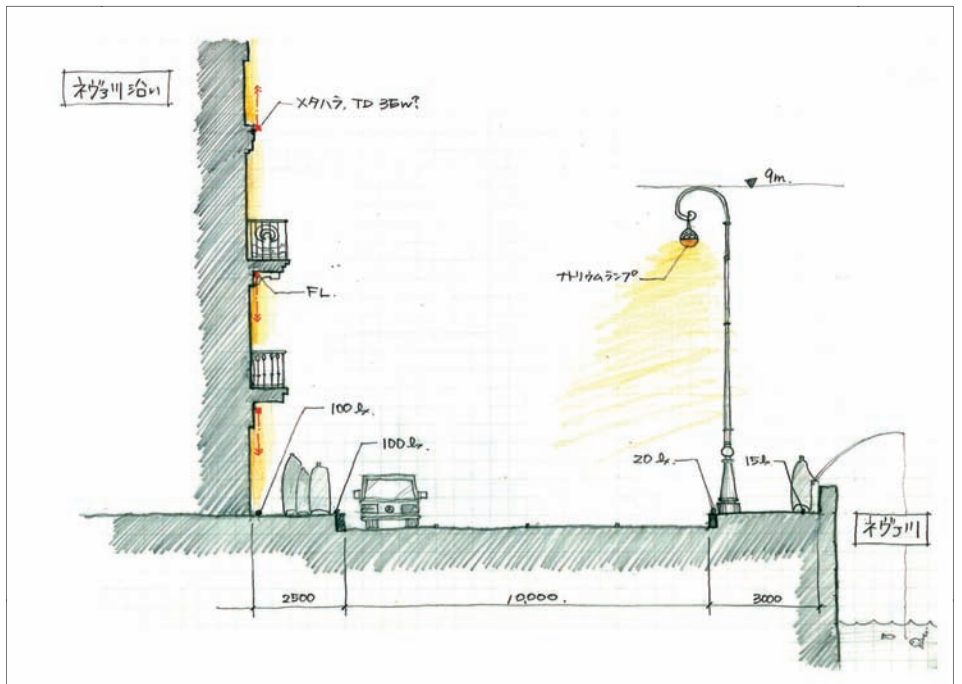
サンクトペテルブルグは大きく蛇行するネヴァ川の河口に位置し、そこからいくつもの運河が中心地を囲うように延びている。私が2年前に調査した隅田川も日本橋に向かっていくつもの運河が延び、同じような場所に感じられた。ネヴァ川も隅田川も夜になると架かる橋はどれもライトアップされ、川にはその景色を観察できる遊覧船が運航している。ただ、隅田川の河岸には夜景を回遊できる遊歩道が整備されていたが、ネヴァ川沿いの歩道はとても回遊するためのものではなかった。寒冷的な気候だけに夜景は遊覧船などの室内から望むというのが常識なのだろうか。そんな遊覧船からの河岸の夜景はとても幻想的で、素直に見とれてしまう。また、驚いたことにただの民家？としか思えない何げない建物までもがライトアップされ、それが長距離に亘ってライトアップされている。しかし、細い運河に行ってみるとネオンサインもほとんど無く、カテナリー照明が寂しげに街並を照らしていた。豪華な光と質素な光の差は経済的格差の表れなのだろうかと感じるロシア調査であった。

(久保隆文)



豪華な装飾がライトアップされた血の上の教会。サインも無く、演出もされない寂しげな水路沿いの街並。

ネヴァ川沿いの道路。明るさはしっかりとれているものの、夜景を回遊するような歩道ではないのが残念。



連続的にライトアップされたネヴァ川沿いの街並。その距離は約700mにも及ぶ。

Transnational Tanteidan Forum 2008 in Belgrade 開催！

2008.9.19

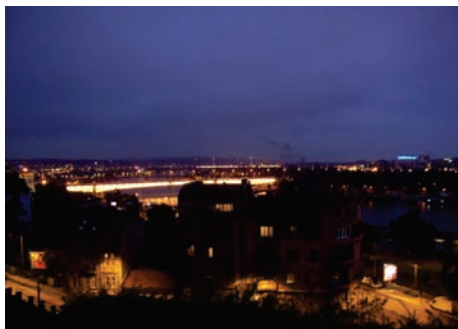
@B.C.Usce, Bulevar Mihajla Pupina 6

■第7回ベオグラードフォーラム

年に一度行われる照明探偵団の世界大会“Transnational Tanteidan Forum”も今年で7回目を数えました。世界に広がる照明探偵団のネットワークを活かして、皆で各国の照明文化について語ろう！ということで2002年に東京で開催されたのを皮切りに、ストックホルム、ハンブルグ、ニューヨーク、シンガポール、コペンハーゲンの各都市で開催してきたフォーラムですが、今回の会場は旧ユーゴスラビアの首都でもあったセルビアのベオグラード。これはTransnational Tanteidanのコアメンバーの一人でもあるストックホルム在住のアーティスト、アレクサンドラの故郷がベオグラードで、ぜひセルビアでも照明探偵団フォーラムを行いたい！という強い希望があって実現しました。Belgrade of Light というイベントの一環として行われたこともあり、連日テレビや雑誌等のマスコミ取材を受けるほど地元での注目度が高いフォーラムでした。

■光の英雄と犯罪者を探せ！

照明探偵団のアクティビティの入門編とも言えるのが、“光の英雄と犯罪者を探せ！”。これは、夜の街に出て自分の好きな光を英雄、嫌いな光を犯罪者として探し出し、その理由について議論し合うもので、今回はこのワークショップも行われました。参加者はストックホルム、ベオグラード、東京などから総勢約50名の学生を中心としたメンバーです。ベオグラードの街を“Riverside”、“Commercial, Pedestrian”、“Ministry”の3つのエリアに分け、3つの混成チームが各エリアを担当しました。オリエンテーションの後、カメラを片手に街へ出て撮影してきた写真を±5段階の“英雄と犯罪者”に並べてパネルにまとめ、3チームがプレゼンテーションする、というのが今回のワークショップの流れ。私は“Riverside”チームに参加しましたが、川沿いには一部夜景を望めるようなビューポイントもあるものの、全体的には暗闇に支配されています。目に入ってくるのはまばらな高圧ナトリウムの街路灯と住宅の窓から漏れるオレンジ色の光。夜のそぞろ歩きのための心地良い光がもう少しあれば良いのに・・・と感じました。



ベオグラードの夕景。川沿いの景色は、高圧ナトリウムの街路灯と住宅の窓からこぼれる暖かいオレンジ色の光で構成されている。



ワークショップは
“Riverside”（左上）
“Commercial, Pedestrian”（上）
“Ministry”（左）
の3グループに分かれて行われた。

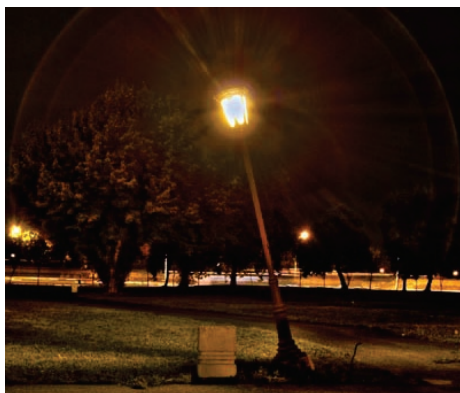


面出団長率いる“Ministry”チームのメンバー。いざ、夜のベオグラードの街へ、光の“英雄”と“犯罪者”を探しに。



煌々と輝く街路灯の下で照度測定中。周囲は暗闇なのに、街路灯の直下は100ルクスもあるのは明るすぎないか？！

ワークショップは2日半程のプログラムでしたが、まとめとプレゼンテーションは1日で行ったので、かなりの強行スケジュール。それでも各国から集まった学生たちの連携で三者三様のパネルが完成し、プレゼンテーション会場も満員御礼状態。地元ベオグラード大学の学生たちも、これだけ照明に注目しながら街を歩くのは初めてだったようで、自分たちの街を見る目が変わったという人もいました。



公園で見つけた街路灯は見事に傾いている。これは光の“英雄”？それとも“犯罪者”？！チームで話し合っ、英雄ということに決定。



夜の街歩きをして見つけた景色をパネルにまとめる作業。それぞれが好きな光、嫌いな光について、意見をぶつけ合う。

■ Lighting Identity of the City

今回のフォーラムのテーマは“Lighting Identity of the City”。これまでのフォーラムでは、様々なパブリックスペースのあかりをテーマごとに取り上げて来ましたが、今回は街全体を俯瞰するような目線で、都市としてのあかりの特徴を捉えることにしました。それぞれの都市に特徴的な光とはどういうものなのか？光で都市を表現するとしたら、どんな絵を描くことができるのか？都市を形成する一要素として光を捉え、都市による違いを浮かび上がらせるようなフォーラムにしたいと計画しました。会場となったベオグラードの高層ビル“B.C.Uisce”の最上階には250名を超える聴衆が集まり、注目度の高さが窺えました。

今回も世界に広がる照明探偵団の各支部からの参加者があり、プレゼンテーションは、東京、ハンブルグ、ニューヨーク、コペンハーゲン、シンガポール、そして初参加の北京から行われました。私は東京の発表をしましたが、プレゼンテーションの準備をして感じたのが、東京がいかに雑多な光の集合体であるか、ということ。とにかく明るくて、おしゃれで、最先端の光があるかと思えば伝統的な光もあって・・・と到底ひとつのキーワードでまとめることはできません。最後に幕の内弁当を例に、全く異なるものが絶妙なバランスのもとに隣り合っているのが東京の Lighting Identity だ！と締め括りました。



“Gallery O3one”にて。ワークショップのまとめでは、各チームが白熱したプレゼンテーションを繰り広げた。



フォーラムの会場となったベオグラードの高層ビル“B.C.Uisce”の最上階には、大勢の聴衆や報道陣が詰めかけた。



各支部による発表の後、パネルディスカッションでベオグラードの照明計画についてそれぞれの意見を展開するパネル。

■ 2009年北京大会へ

さて、来年2009年は北京で第8回目のフォーラムが予定されています。これまでの各都市からプレゼンテーションが行われるスタイルとは少し変えて、開催地の中国ならではのテーマと新たな試みも企画中です。オリンピックという祭典を経て、北京の街がどのように変わったのかも見所のひとつ。日本からも近いので、皆さん会場に足を運んで白熱した議論に加わってみませんか？

(田沼彩子)

【照明探偵団の活動は以下の 21 社にご協賛頂いております。】

ルートロンアスカ株式会社
岩崎電気株式会社
カラーキネティクス・ジャパン株式会社
パナソニック電工株式会社
ヤマギワ株式会社
山田照明株式会社
マックスレイ株式会社
ニッポ電機株式会社
エルコライティング株式会社
ウシオライティング株式会社
株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン
トキ・コーポレーション株式会社
東芝ライテック株式会社
大光電機株式会社
コイズミ照明株式会社
マーチンプロフェッショナルジャパン株式会社
タルジェットイ ポールセン ジャパン株式会社
株式会社遠藤照明
湘南工作販売株式会社
株式会社ウシオスペックス
森山産業株式会社

